

第1回 伊丹市幼児教育ビジョン策定委員会

議 事 録

伊丹市幼児教育ビジョン策定委員会

平成 29 年度 第 1 回 伊丹市幼児教育ビジョン策定委員会

- 1 日 時 平成 29 年 9 月 12 日 (火) 17:00～19:00
- 2 場 所 伊丹市役所 3 階 議員総会室
- 3 出席者 **【委員】**
出原委員、卜田委員、富岡委員、市川委員、大西委員、佐伯委員、
藤本委員、馬殿委員、谷口委員、林委員、細川委員
※大方委員、伊藤委員、阿嘉委員は欠席

【事務局】
木下教育長、
教育委員 江原委員、川畑委員、川崎委員
二宮教育次長
幼児教育施策推進班 村上参事、佐藤参事、谷澤参事、須磨副参事、
矢田主幹、池田主幹、大村主幹、樹山主査、
学校指導課 廣重課長
- 4 傍聴者
- 5 次 第
 - 1 開会
 - 2 委員の委嘱・任命
 - 3 教育長あいさつ
 - 4 委員紹介
 - 5 会長・副会長の選任
 - 6 会長あいさつ
 - 7 諮問「(仮称)伊丹市幼児教育ビジョンの策定について」
 - 8 議事
 - (1) 議事録署名委員の指名
 - (2) 傍聴要領(案)と会議の公開について
 - (3) 幼児期の子どもや取り巻く環境について
 - ・現状と課題
 - ・意見交換
 - 9 閉会

議 事 記 録

- 1 開会（省略）
- 2 委員の委嘱・任命（省略）
- 3 教育長あいさつ（省略）
- 4 委員紹介（省略）

5 会長・副会長の選任

会長：卜田委員　副会長：出原委員、富岡委員

- 6 会長あいさつ
- 7 諮問（省略）

8 議事

(1) 議事録署名委員の指名

会 長： 本日の議事録に署名を頂く方を会長より指名させていただくことになっている。名簿の順に市川委員と大西委員にお願いしたい。

(2) 傍聴要領（案）と会議の公開について

< 事務局より傍聴要領（案）について説明 >

会 長： 傍聴要領と本日の会議公開について提案があったが、ご異議ないか。

< 「異議なし」の声あり >

会 長： では、傍聴要領（案）を正式な傍聴要領とさせて頂く。今から会議を公開とさせて頂くが、本日の傍聴希望者は何名いるのか。

事務局： 本日は傍聴希望の方は4名いる。傍聴要領第2条に基づき、会長に傍聴定員を決めていただくことになるが。

会 長： 傍聴要領に従い、本委員会では傍聴定員を23名としたいが、ご異議ないか。

< 「異議なし」の声あり >

会 長： では、傍聴希望者に入室していただくように。

< 傍聴者4名 入室 >

(3) 幼児期の子どもや取り巻く環境について

会 長： はじめに、伊丹市幼児教育ビジョンを策定するにあたり、策定の背景と趣旨について説明してほしい。

＜ 事務局より

参考資料（仮称）伊丹市幼児教育推進計画（案）及び資料4～6に基づいて説明 ＞

会 長： 事務局より伊丹市の現状の説明があったが、「これからの幼児教育がどうあるべきか」について、多角的に意見を出しながら、伊丹市としてのビジョンを策定していきたい。特に今後、社会が変化していく中で、伊丹市も多様性が出て、伊丹市から世界に出ていく子ども達もいる中で、どのような力をつけていく必要があるのか、これからの時代を子ども達がどのように生きていくのかということが大事である。その力を育てるための方法、特に幼児期の教育はどうあるべきかについては、広く共有されていると言えない。今回の幼稚園教育要領、保育所保育指針、認定こども園の教育・保育要領の改訂にあたり、幼児教育の基本は、遊びや子どもたちの活動を通して発達に必要な経験を積み上げていくことになるが、これは、関係者には常識だが、他の方はよくわからないのではないかという議論の経緯がある。これは、保育の立場にいる我々は反省しなければならない。また、今回のビジョン策定を通し、「遊び」を通して発達に必要な経験を子どもたちがしているということを、改めて示していく役割がある。委員全員、また市全体で共有する必要がある。同時に社会全体の課題として、「子どもの貧困」という問題が注目されている。貧困状態に置かれている子どもたちが、将来の希望や自尊感情、将来的な学力等に関しても、様々な困難を抱えさせられているということがデータとして示されている。伊丹でも、同様の課題となってくるだろうし、伊丹市に暮らすすべての子どもたちにとって、何が重要なのかについても意見交換しながら進めたい。

まず、どのようなことに重点を置き、ビジョンを策定していくのかを考えていきたい。資料5「幼児期の子どもや取り巻く環境について」に基づき、ご意見をお伺いしたい。

資料5 1. 現在の幼児期の子どもについて

会 長： 周りにいる子どもにについて気になることがあれば聞かせてほしい。

A委員： 自分の気持ちを主張するというのが弱い。自主性はあるが主体性が難しい。遊びの中でも、ある程度与えられたことは生き生きと遊べるが、自分の考えのままに自由に遊ぶことは不安で、力を発揮しづらい。子どもたちに、この主体性を付けたい。

B委員： 「子どもの貧困」とは、親が子どもに関わる力の弱い子どもと、しっかり関わっている保護者の子どもとの差である。子ども自身には力があり、生きる力の基礎を培うため、基本的な生活習慣の自立や人との共同、自ら取り組もうとする姿勢を基本に置いて保育している。生活習慣も、以前は家庭である程度身に付いていたが、現在は、きちんと保護者と共に身に付けさせていかなければならない。

C委員： これからの時代、子どもを守るということよりも保護者を支えていかなければ

ばいけない部分が多い。伊丹市の特色としては、公立・私立、幼稚園・保育園共に、同じ教育をすることは、全国でも珍しい。良い教育になれば良い。

D委員： 現場では、子どもの言葉が非常に重要である。子どもの育つ力は非常に強いが、「無理無理、もう無理」という言葉が目立つ。この言葉はどの歳児でも目立つ。以前はあまりこのような言葉は聞かなかったが、子どもの中での達成感、成就感が問われる。子どもは、自分自身で生きる力を身に付けていかなければならない中で、「無理無理、もう無理」という子どもを何とかしていくことが重要である。

E委員： 自分の考えを主張することは出来ていると思う。ただ相手の気持ちを読み取る、察するということが難しくトラブルになる。主体性は大切だが、周りや相手をどう想像するかが必要である。また、小学校に入り幼稚園と違う多くの友達と一緒に遊べる場面では、幼稚園の時とは違う課題があるのか、遊びにくい子どももいる。また、発達面で、苦手な部分を抱えている子どもに対して、子どもたちをどのように関わらせ、どのように幼い頃から相手の気持ちを読み取る等の感覚や気持ちを育てていくのかという部分も重要である。

F委員： ボール遊びのできる公園がない。畑や田んぼも少なく、普段から体を動かして保護者と一緒に遊ぶ場所が少ない。遊べない公園ばかりで、少しくらいならと思ってもすぐに怒られるので、普段から子どもたちでコミュニケーションをとることが難しい。また、働くお母さん達も多いので、孤独な方、ご近所づきあいが疎遠な方が多い。近所同士の子どもので遊ぶことが、すごく少ない印象がある。

G委員： みんなで遊ぶのではなく、テレビ、ゲーム、スマホ等を使い、1人で遊ぶことが増えている。泥んこ遊びや虫取り等、自然の中で遊ぶことが減少している。そのため、友達と体を動かして遊ぶことも少なく、運動能力の低下があったり、他の子との関わりが苦手で、集団でルールを作って遊んだり、我慢をすること、基本的な生活習慣や態度が身に付いていない子どもが多くなった。

H委員： 約2箇所子どもを見る機会がある。1つは、地域交流「みんなのひろば」で、もう1つは、保護者が送迎する時である。これは小さな公園が拠点となっている場合、大概のグループは帰ってきて、集合場所でお母さん達はワイワイやっている。子どもたちは公園で遊んでいる。私が感じる限り違和感はない。「みんなのひろば」では、子どもたちは積極的に手伝おうとしたり、割り込もうとして周りから怒られ順番を守る等、昔と変わらない。最近、あまり個性がない子どもが増えていると聞かすが、そのような感じもない。公園で遊んでいる子どもを見ている、これまでに意見で出たようなことは見えない。

会 長： これまでの議論から、子どもの主体性という育ちの問題、生活習慣が十分身に付いていない、人との共同や関わる力の問題、相手に対する想像力という課題がある。また、「無理無理」と線を引いてしまう姿もある。更には、保護者を支える必要性が高くなっているという意見があった。I委員、J委員からも、今まで伊丹に関わって見えてきていること、大事にしていかなければならないことについて、いかがか。

J 委員： 伊丹市に限らず思うことは、子どもは、そもそもの持っている力は基本的に変わらない。なぜこれまでに出了課題があるのかということだが、子どもは独立して生きているわけではなく、大人の社会で生まれ育ち、様々な事を吸収している。主体性の問題、共同性の問題、コミュニケーションの問題等の子どもの課題は、実は大人の課題である。大人は、どのような形で関わっていくのか、どのようなところが重要かということを確認することが重要である。

I 委員： 子ども自身はあまり変わっていないと思う。「やりたい」「楽しい」という心を持って育てているが、幼児期を取り巻く環境が、ここ数十年で大きく変化している。中でも、「子どもは愛されて育たないと絶対ダメだ」ということである。今回、指針や教育要領にある、幼児期の終わりまでに育てほしい 10 の姿は、子どもたちが健康に育つこと等当然であることも記載されているが、すべて愛情のベースの上に育つものである。環境の変化の中で、愛情のあり方というか、上手な距離を保つ、「遊んできていいよ」みたいな環境がない現状は、大人が作った社会であり環境である。子どもに「愛している、安全安心を守る」と言いながら、子どもたちが本当に良い発達をするための安全安心なのかということも問わなければならない。ボール遊びができる場所がないということは、危ないことをさせない、転ばないようにするために遊ばせないようにしている。便利という名のもとに子どもたちが自分達で工夫しない環境を作ってしまった。このような議論をした後、伊丹市は保護者や子どもたちを取り巻く大人をどのように支えるか。伊丹市は人と共生する自然環境をすごく大事にしていることもあり、そういうことを審議会でも議論していければ良い。

会 長： 大人のあり方が子どもたちの姿に影響を与えている。今回のビジョン策定も、大人のあり方を見直す1つの契機になり、市全体で子どもたちを支えることの変化に繋がれば良い。特に幼児期の子どもの姿について、もう少し議論したい。

日本は、相対的貧困率が非常に高いというデータがある。伊丹の現状はどうか。また、経験の格差とも言われている。遊びの中で、いろいろな経験をしている子どもと、していない子どもでは、遊び方もかなり違う。実感としてはいかがか。

A 委員： 園に通う家庭に、まれに伺える家庭がある。持ち物にも少し表れる。子どもの動きから、まったく外出せず家庭で育て、保護者は働きに行く家庭がある。園にもよると思うが、約1割いると感じる。

B 委員： 色々なもの（生活や時間）に余裕がない家庭には、子どもに向ける目、愛着関係を作りにくい子どもがいる。決して多人数ではないが、年度によってはクラス運営が難しい。特に乳児期は1対1の関係がすごく大事であり、保育所は家庭に代わる。0歳、1歳の保育のあり方としては、家庭と似た環境で子どもたちを育てていく育児担当制を取り入れながら、工夫している。家庭で欠けているところを保育所で補いたい。

D 委員： 相対的貧困率のデータは、市からの提出をお願いしたい。

事務局： 次回までに出す。

資料5 2. 幼児期を取り巻く環境について

会 長： 他はいかがか。「子どもの姿」についての課題抽出が出来れば、次に、「取り巻く環境」について議論したい。伊丹の特色や大切にしている取組について議論したい。伊丹という場が持つ力も聞かせてほしい。乳児の担当制は伊丹市の公立保育所すべてで実施しているのか。

B委員： 全園で、「乳児の担当制」という言葉を打ち出していないが、方針として家庭に代わる1対1の環境が大切だということを打ち出していると思う。

J委員： 「子どもの姿」について、現在も幼稚園・保育園・認定こども園の各施設で、姿を描きながら、1人1人の育ちを支えてきている。共有したいことは、10の姿は評価ではないということである。小学校入学のための評価基準ではないが、大人は評価してしまう。10の姿は評価ではないということ、ビジョンを策定し、あるいは子どもたちの豊かな姿を作ろうとするときに共有したい。

会 長： 幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿を、幼稚園教育要領、保育所の保育指針、認定こども園の教育・保育要領の改訂の目玉としている。これは従来の要領にある5つの領域から出てきた。この10の姿を到達目標とする考えがあるが、これは評価基準ではなく、1人1人の子どもに伸びていってほしい緩やかな方向性を示すもので、大人が意識していくべきポイントである。この10の姿は、子どもを同じように育てていくのではなく、地域性や通う施設等で濃淡がある。この10の姿を中心に策定した委員にも、10の姿全部ではなく、重要視する姿があってもいいのではという議論があった。これらから、10の姿の中で、特に伊丹で重視するポイントは何になるのかということ意識しながら議論したい。

子どもの姿に関して他にいかがか。

会 長： 事務局をお願いしたいが、これからの社会は人の移動もあり、どんどん多様化する。国際化がどのように進んでいるのか、何らかのデータを提供してほしい。

会 長： いくつか重要なキーワードが出た。子どもを取り巻く環境について、大人の姿や社会、環境等での課題、あるいは良さを聞きたい。伊丹市は自然環境を大切にしているということだが、伊丹の特徴として大切にしているところ等はないか。また、ボール遊びが出来ないとのことだが、場所の問題か、使い方の問題か。

F委員： ボール遊びは広い公園でしかできない。近くの小さい公園は広場があっても、ボール遊び禁止の札がある。ボール遊びができる場所を考えなければならない。また、シーソーやブランコ等の遊具が取り外されている。当たり前が出来ると思っていたうんていもできない子が多く、普段からあまり動いていないという印象がある。

C委員： 遊具はもちろんだが、子どもの声がうるさいと言われることが多く、元気い

っばい走り回れない。園で、子ども同士の喧嘩等も成長の一環と思っているが、親同士が怖がっている。

昔と比較し、3歳で入園する子どもの中に、オムツが取れていない子が増えている。トイレトレーニングを幼稚園に頼る人が増えている。

会 長： 子どもを見る目が社会全体ですごく変化している。

C委員： アトピーの子どもが増えた。親が過敏になっているのか、食べれない子どもが増えてきた。

会 長： 子どもに対する大人の関わり方や見方、保護者の子育てに対する知識の弱さもある。実感として、知識はどのように伝わっているのか。

C委員： 核家族化が進んでおり、子どもはこういうものだ等がわかっていない。

会 長： 自分の子どもが生まれるまで、小さな子にほとんど関わったことがない人が増えている。学生でも初めての実習で、初めて子どもに関わる人が結構いる。

C委員： 保育士や幼稚園教諭にもそういう人が多い。就職後、まず0歳児クラスに全員入れ、子どもと向き合わせる。先輩は口を挟まず自分で対応し、段階的に幼稚園教諭にさせる。

A委員： 保護者の人との関わる力では、トラブルを避けようとしていることが多い。また、子どもを取り巻く環境で、習い事をしている子どもが多く、幼稚園から帰宅しても習い事で友達と遊ばず、昔の様に自然と子ども達が公園に集まって遊びを始めることが減っている。

会 長： 子育ての外注化という言葉がある。子どもに様々な力を付けることや、経験させていくことは、外に依頼する。それ自体は悪くないが、伊丹でも子育てに関することは、家庭よりも専門家に依頼するという意識を持つ保護者がいるのか。

C委員： 公立でも私立でも、保護者関係を良好にさせるため、様々な事を行っている。始めは子どもを中心に親同士が盛り上がり、段々、親同士だけで盛り上がり、子どもは別という様に変化する。子どもの育て方等を話し合うよう言っても、段々自分達の話題になる。保護者が大人になっていない様に思う。また、保護者にオムツのとり方等を説明すると、初めて聞いたという人が多い。これは愕然とする。

会 長： 子育ての方法を伝えるシステム自体がなくなってきており、伝え方も園が担う部分が多いのか。

J委員： 子育ての外注化で、何でもシステマティック、お手軽にということが多い。保育園・幼稚園では手をかけているが、保護者は任せればよいと思っている。ある園では、先生が子どもに声を出さないよう言いながら園庭に出ていく。考えられないが、大人がそのような環境を作るよう要求しており、これは行き過ぎ

ている。

また、「子どもの貧困」の問題は、裕福な家庭であっても起こっているかもしれない。貧困という問題だけではない部分の問題がある。宮崎駿監督が、「大切なことは面倒だ」と言っている。大切なことは面倒で、辛い部分もあり、手がかかる。今は、これらを様々な場面で手放している。手放さず支えていくものが何かというと、システム等ではなく愛であり、伝え方、手のかけ方である。手をかけていくということが大切だ。

会 長： システムティックにすると、そこにはめていくということになり、一番大事な部分を落とすかもしれない。保育の現場では、緩やかさや余裕、遊びの部分があるからこそ動いていく。今の子どもは、家庭でも近所でも帰宅すると、常に大人の目があるため、いたずらもできない。今後の保育者に必要な力は、多少の悪いことなら見て見ぬふりをするという力である。その余裕を残しながら保育することが大切である。大人のあり方を見直すことも重要である。

I 委員： 市等が、育児をする上で必要なことを保護者に発信していけばよい。習い事も子どもが興味を失っていることにも気づかず、無理矢理習わせていることがあり、間違った愛情のあり方である。指針や教育要領にある子どものあるべき姿について、親が理解しなければならぬため、あるべき姿について、国や伊丹市から、子育てフォーラム等で具体的に示していかなければならない。そうでなければ、出来不出来の価値観が生まれ、出来ない子どもが悪く、その子どもをいじめること等に繋がる。核家族が多く、祖父母等の大らかな支え手が身近にいないため、習い事等に頼る。例えば、市がボール投げの出来る場所を指定し、怪我をしても大丈夫なように市が保険を掛けることが出来れば、絶対に子どもたちは喜ぶ。

G 委員： ぜひ、そういうところを作ってほしい。

会 長： こういう子育てがいいよと言われても、実現できる状況にないことで、保護者は悩むことが多い。そのあたりを具体的に、子育ての方法や場があるということに繋げたい。

D 委員： 「遊びを通して」という言葉は伝わりにくい。我々には共通認識としてあるが、保護者を始め一般の人は、「遊びを通して」と言われてもわからない。保護者の記憶には、学校教育という場で、自分のしたことや対人関係がどうであったかという知識や経験だけが残し、幼稚園や保育園で自分の育てられ方や受けた保育や教育の内容は残っていない。従い、「遊びを通して」ということを、具体的に伝えないと、保護者はわからない。子どもたちの発達を支援するために、子どもの性質や発達を見て見通しを持った保育を実施していることを保護者にわかりやすく発信しなければ理解できない。このことも踏まえ、保護者の納得が得られる発信をすることが重要だ。

会 長： 「遊びを通して」ということを伝えていくことは必要である。ただ、子ども自身は、遊びの中で、例えば、思いやりの感情を育てているという意識を持って遊ばない。幼児教育の取り組みの中での基本的部分を、いかにわかりやすく伝え、どのような力に繋がるのかということを具体的に説明する必要がある。

次の、これから必要な力は何かという話に移行していくが、「非認知能力」という言葉が出てきた。この言葉は、友達と共同する、ねばり強く興味関心を持って物事を行う等、これまで幼児教育・保育で「遊びを通して」という言葉で表現してきたものを、具体的に説明するための言葉ではないかと思う。

資料5 3. 幼児期の子どもたちが、この先の将来生きていくためには、子どもたちにどのような力が必要だと感じますか

会 長： 次に、必要な力について議論していきたい。園で大切にしていること等を紹介してもらえればよいが、いかがか。

C委員： 現場では5領域という言葉から、この5領域を育てなければならないとなる。遊びの中で自分のしたいことをやりながら、培っていくことを「非認知能力」という新しい言葉を使っている。この内容は昔から実践していることで珍しいことではない。言葉が新しいため、現場も、子どもは育てるよりも見守ることが大切であると思い、子どもと関わっている。

また、保護者に子育てが楽しいと思える場面を作らなければならない。自分の子どもが頑張り達成する姿を、保護者が見て喜ぶことにより、保護者は自分の子どもを愛しく思い、子育てが楽しいと思うようになる。保護者が自分の子どもを愛しく思え、成長を喜んでもらえるようなことに視点を置いた環境づくりが良い。

会 長： 楽しいとか、子ども自身の好きなことを育てることが重要である。好きだからこそ、様々な力が育つ。好きと上手は違う。上手と言い出すと、比較になるため、好きを育てることが重要だ。

D委員： 私は、「楽しい我慢」というキーワードを伝えている。我慢すれば、この先きっと楽しいことがあるという経験をさせることにより、幼児教育の中で忍耐力を付けてあげたい。

J委員： 豊かな感性や多様性の育て方には、環境が関係する。環境にはハード面とソフト面がある。ハード面では、幼稚園、保育園では、制約はあるにも関わらず多様なことをしているが、小中高では、ある意味統一感がある。小中高でも大金をかけずに、彩りを与え、面白味を作り出すことは可能である。日本のモノ作りはとてもきっちりしているため、少し崩すということが出来ない。子どもは怪我をしながら様々なことを覚える。ソフト面では、必ず大人も子どもも挨拶をするという環境をわざわざ作る。このような彩りを、ちょっとした工夫やアイデアで学校教育の現場等に与えることがあってもよいのではないか。

A委員： 知徳体という言葉がある。幼児期には、中でも自尊感情的な力を一番つけたい。物事にチャレンジしても失敗することがあるが、自分は違う分野であれば得意なことがあるということ等を自覚し、自尊感情は高くなる。自尊感情が高くなれば、子どもは様々な知識を学び挑戦していくと思う。

I委員： 愛されて育たなければ、愛情を持てる人になることはできない。愛されて育てられれば、自尊感情を持つことができる。保護者に受け止められながら育てられるのと、やめなさいと切られて育てられるのとでは、育ちが違う。愛され、

人を愛することは素敵なことだと思えるように育てたい。市から保護者に、子どもの学び方や育ち方、また、保護者が愛情をもって暖かく見守ることで、子どもは自分に自信をもって育っていくということを伝える必要がある。

C委員： 公園については、子どもが危なくない程度で、したいことができる公園を作ればいいのでは。子どもの背の高さで花が咲き、背の高さに物が揃っている場所で遊ばせたい。

F・G委員：是非

D委員： 子どもたちが伸び伸びすることで、怪我をし、痛い目にあうことがあり、そのことにより様々なことを学ぶ。これは、保護者の理解と、それにより子どもが発達することを発信することが重要である。このことを理解していない保護者が多いため、コミュニティの場を作る必要がある。

会 長： 次回以降、継続しながら議論を深めていきたい。本日の議論の中で、伊丹の子どもたちの置かれている状況では、主体性の課題、保護者の人との関わる力が弱いという課題、保護者だけではなく市民全体の子どもの育ちに対する共通理解を深める必要があるという課題等が出た。また、愛情を大切にしていかなければならないという議論もあった。次回以降、議論を深め、良いビジョンを策定していきたい。

9 閉会